

網本 和(編)

PT・OTのための高次脳機能障害 ABC

評者 森岡 周

畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター センター長・教授

「リハビリテーション医療のなかで難渋する症状を挙げよ」と言われれば、おそらく真っ先に挙がるのが高次脳機能障害ではないだろうか。なぜなら、複雑な脳のシステム機能から高次機能は生み出されていることから、脳損傷後にみられる高次脳機能障害は実にその現象が多彩であり、介入が一筋縄ではいかないためである。また、介入方法のエビデンスがまだ明確でなく、療法士の技術というよりも課題をどのように組み立てるかといった想像・創造性に委ねられているからである。

本書はこれまでの症候学的観点から、「意識障害」「注意障害」「認知症」「失語症」「失行症」「失認症」「半側空間無視」「Pusher 現象」「記憶障害」「遂行機能障害」の10の症状に分け、その現象、メカニズム(仮説を含む)、評価、そして治療アプローチについて系統立って書かれている。本書は古典の症候学から現代の神経科学的知見までおおよ網羅されており、初学者にとっては本書のタイトルにもあるように、まさに「ABC」とまずは押さえておくべき知見が平易に解説されている。とりわけ図表が多く使用され、視覚的にも学習しやすいところが特徴である。さらに、そのほとんどで症例提示されており、臨床経験の浅い療法士にとってはその流れがイメージしやすいのではないと思う。

一方、本書の最大の特徴は解剖学的基盤と画像診断が盛り込まれている点ではないだろうか。画像を読解し、症状との整合性を図り、そして障害の予後を予測しながら臨床介入していくことは、高次脳機能障害に対する臨床手続きとして欠かせない。画像を読み取ることが可能であれば、何という脳の機能がまだ生かされ、そしてどのような介入であればそれをさらに賦活させることができるかなど、明確な臨床介入のビジョンを持つことができる。これまでの臨床はそれを無視してきた傾向にある。本書を読

み進めることで、そうした問題が払拭できるのではないかと期待できる。

本書は首都大学東京の網本和教授とそこに関係する諸氏の協力の賜である。網本先生はこれまで一貫して高次脳機能障害の臨床・研究・教育に従事されてきた。そして執筆者の顔ぶれをみると今なお第一線で臨床研究されている方々である。網本先生の長きにわたる経験に基づいた視点、そして分担執筆された方々の現在進行形の情報、それらは信頼できる情報以外の何物でもない。

今回は脳の局在を中心にそのメカニズム・評価・介入方法が示されているが、現在発展し続けている白質線維の損傷を捉える手法に基づき、その病態・評価・治療アプローチが語られる時代はすぐそこに来ている。できれば、それらに基づく新しい情報を組み込んだ第2版へと今後進展することを期待したい。

いずれにしても、本書は多くの療法士や関係職種・学生の皆様に手にとっていただきたい良書として自信を持って薦めることができる。

B5判・236頁・2色刷
定価：5,500円＋税
文光堂刊、2015年